<table>
<tr><td>授業科目名</td><td>演劇教育論</td><td rowspan="5">担当教員</td><td rowspan="5">平田　知之
石井　路子
鎌田　麻衣子</td></tr>
<tr><td>必修の区分</td><td>選択</td></tr>
<tr><td>単位数</td><td>2 単位</td></tr>
<tr><td>授業の方法</td><td>講義</td></tr>
<tr><td>開講年次</td><td>3 年 第 3 クォーター</td></tr>
<tr><td>講義内容</td><td colspan="3">演劇を活用した教育を支える理論と実践について、最新の動向を実践的に学ぶとととともに、文献を活用して、通時的、共時的な理解を深め、エビデンスに基づいたワークショップの企画提案する力を身につける。</td></tr>
<tr><td>到達目標</td><td colspan="3">・演劇を活用した教育が、どのような理論の積み重ねの上に成り立っているのかを通時的に理解する。　・演劇を活用した教育の意義を、エビデンスをもとに説明できるようになる。　・理論に支えられた、演劇を活用した教育の企画を、現場に合わせて提案できるようになる。</td></tr>
<tr><td>授業計画</td><td colspan="3">第 1 回 オリエンテーション、演劇教育論とは何か？〈鎌田〉
第 2 回 クリエイティブドラマ（アメリカ）とプロセスドラマ（イギリス）〈鎌田〉
第 3 回 ヴァイオラ・スポーリンとキース・ジョンストンのインプロ（即興演劇）〈鎌田〉
第 4 回 ジョナサン・ニーランズとアウグスト・ボアールの批判的演劇教育〈鎌田〉
第 5 回 日本演劇教育史（1）大正新教育運動と学校劇〈平田知〉
第 6 回 日本演劇教育史（2）戦後の学校演劇 ～学芸会、部活動、総合的学習〈平田知〉
第 7 回 日本演劇教育史（3）戦後の学習指導要領概観と演劇教育〈石井〉
第 8 回 日本演劇教育史（4）演劇を活用したコミュニケーション教育〈平田知〉
第 9 回 学校における系統的演劇教育カリキュラム実践例〈石井〉
第 10 回 Teaching Artist とニューヨークの演劇教育〈石井〉
第 11 回 韓国の文化芸術教育〈石井〉
第 12 回 演劇教育と記録　「省察的実践」をめぐって〈平田知〉</td></tr>
<tr><td>事前･事後学習</td><td colspan="3">事前 予め指定する資料に目を通しておく 事後 各自の文献リストを毎回アップデートしてレポートする</td></tr>
<tr><td>テキスト</td><td colspan="3">各回の授業において資料を配付する</td></tr>
<tr><td>参考文献</td><td colspan="3">『ドラマ教育入門』（小林由利子他、2010）
『即興術』（スポーリン著　大野あきひこ訳，2005）
『教育方法としてのドラマ』（J. ニーランズ・渡部淳，2009）
『省察的実践とは何か』（ショーン：著　柳沢・三輪：訳，2007）</td></tr>
<tr><td>成績評価の基準</td><td colspan="3">平常点（ディスカッションや協同作業への参加）60% レポート 40%</td></tr>
<tr><td>履修上の注意
履修要件</td><td colspan="3"></td></tr>
</table>

実践的教育	
備考欄	理論科目「演劇教育入門」や実践科目「演劇ワークショップ実習Ｄ」と合わせて理論と実践の往還を図っているので、履修計画の参考にしてほしい